

# 真の人道支援への発展を求めて

—— 国際開発会議 Asia NGOs International Development Conference

石原 顕 正

本日はたいへん貴重な機会を与えて頂き感謝申し上げます。

お手元に、NPO法人Earthの活動経過や内容の資料を用意しましたのでご参照ください。

今年は隣国との「領土問題」が表面化し、大きな政治課題となりました。

ことに「尖閣諸島」の案件につきましては、二〇一〇年九月中国漁船衝突事件以来、今年九月の中国国内における反日デモに関する諸問題は深刻な事態となりました。

ちょうど日程が重なるように、日本人に対する中国での反日デモが予定されていることへの注意喚起が在中国日本大使館から発信されていたので、「台湾は大丈夫か」と周囲の心配もありましたが、現地は実に平穏でした。

NPO法人災害危機管理システムEarthは去る九月、台湾・台北市内の国際会議場で開かれた「二〇一二アジアNGOs国際発展会議」にゲストスピーカーとして招かれ、私をはじめ理事・通訳・社員の四名が出席した。まず会議の内容、国境を越えた連携組織、今後の展望についてお話したいと思います。

## 1 会議に招かれた経緯と中華民国レスキュー隊との絆

「二〇一二アジアNGOs国際発展会議」は台湾・外交部をスポンサーに、国際支援の向上とアジアNGOのネッ

ネットワーク強化を目的に開催されているもので、国際支援に携わる台湾のNGO（非政府組織）約二十団体からなる「台湾海外援助発展連盟（台湾AID）」が企画・運営を行っている。アースはこの台湾AIDに加盟する民間レスキュー隊「中華民国搜救総隊」の推薦を受け会議に出席することとなった。

アースと中華民国搜救総隊の縁は、東日本大震災で私が搜救総隊を率いて行方不明者の捜索活動を行ったことに始まる。

昨年三月一日の大震災発生直後から、Earthでは情報の収集を開始。被災状況の把握、全国から殺到する問い合わせへの対応におられる中、自坊である立本寺に突然、急を要する一本の電話が入りました。

それは私の一〇年来の友人である日本在住の中国人二胡演奏家・程農化氏をプロデュースしている女性からでした。私が「長瀬さん、お世話になっております」……と、いきなり「実は、台湾のNGOレスキュー隊が来日しましたが、都内に足止めされています」

私にとっては、「長瀬澄子さんが、台湾が？」しばらく話の意味がわかりませんでした。

日本での大地震、天津波発生により一三日、日本側の派遣要請を待たずに台湾から成田に到着した台湾NGOレスキュー隊中華民国搜救総隊三五名が東京都内で足止め状態にあり、大型バス二台で緊急避難的に、東京板橋にある台湾東京別院佛光山寺に留まっているとの内容でした。

長瀬さんを介して紹介されたNGO台湾国際佛光会の日台交流協会渉外担当・小笠原弘晃顧問からも「台湾から人道支援のため緊急来日した民間のレスキュー隊です。一刻も早く現地に向かい救助活動を行いたい。なんとか受け入れてもらえないか」との依頼でした。

小笠原さんからも、政府公的機関をはじめ政治的にも八方手を尽くしたがどこも受け入れてもらえない。窮状を訴えられ、私は「人道支援であるならば」と、受け入れを承諾しました。

それからまず新宿、池袋署など東京都内の警察に連絡しましたが、「日本側、特に現地からの要請書類、受け入れを証明できる書類が必要」とのこと。

やっとのことで地元の山梨県庁、県警本部などに問い合わせ、「緊急車両通行許可証」の発行先を特定。NPO法人Earthとして「緊急救援のため被災地に出動したいので、特別に即日発行するよう」求めました。

しかし、書類の記載がやけに細かい。「使用する車両の車検証、運転手の免許証の写し、乗車している隊員名簿、積載装備品の明細等」、さらに活動現場の特定（何処に行くのか）すべて明記する必要があります。―これからは時間との勝負。一三日夕刻より徹夜ですべてをクリアし、翌朝、警察の窓口が業務開始と同時に申請書類を提出することが急務でした。

受け入れ↓許可証申請・交付↓現地への輸送↓現場での救援コーディネートへ

過去の経験から、被災地現場はすでに行政あるいは消防の管理下であり、海外からのNGOにとって言語・習慣の問題もあり、容易に救助活動に着手する段階になる事は困難と判断していたので、捜救総隊の隊員三五名に同行、雪の舞う東北道を北上し岩手県・大船渡市で捜索活動にあたった。

行方不明者捜索の結果、生存者ではなく、多くの行方不明者の遺体を発見しました。

徹夜でバスを走らせ、みぞれ混じりの冷たい雨の降る中、寒さに震えながら捜索現場に立ち、被災地の惨状を目の当たりにして、すべてが受け入れられるものではなかった。

目の前に屍袋に収容された遺体が搬送されてくるたびに、それは現実には死を確信させられることになりました。

いつものことながら、大災害発生の際にまったく予期しない、思いがけない事態が飛び込んでくるが多く、今回もとても衝撃的な出発となりました。

こうして東日本大震災では、史上類を見ない広域で甚大な被害を前に、私たち日本の支援関係者は、海外での国際

的に行われる災害支援において、今回、災害当事国「当事者」としての対応に直面した。これまでは世界各地における紛争や災害に際して、特に日本政府やNGOが積極的な人道支援の関与を行ってきた。しかし、今回、東日本では、これまでのケースとは反対に、国際的支援の受け入れ側として、自国の社会制度や習慣の中で、海外からの数多くの担い手による多様な支援を被災者に「つなぐ」役割を担うことは、新たな挑戦であり、支援活動を展開する上で重要な鍵となりました。

## 2 「1011アジアNGOs国際発展会議」内容

会議は国立台湾大学の敷地内にある国際会議場で九月一四、一五日の二日にわたり開催され、呉敦義台湾副総統をはじめアジア各国で活動するNGOの代表や会員、学术界・国際医療機関・政府機関などの関係者三百人以上が参加した。

### ◆一日目

午前中は米国独立部門総裁のDiana Avivが「二一世紀における世界共同戦略」と題して講演。続いて「緊急支援とNGOの挑戦」が、Earth理事長をはじめ各国代表でNGOに携わる六名が登壇して行われた。

午後も同じく、国際協力NGOセンター（JANIC）の講演に続いてパネルディスカッションが行われた。講演者、パネリストの発表内容は次の通り。

### 午前・講演 I 「二一世紀における世界共同戦略」

米国独立部門総裁 Ms.Diana Aviv（ダイアナ・アビー）

Diana氏は、技術進歩が各地の人々をつなぎ、世界が一つになって物事をなす可能性が広がっている一方で、世界人口の四分の一の人々が貧困のなかに生き、五十カ国が地域紛争に苦しんでいると危惧。「貧富の差を考えると、そのような問題が政府や労働団体だけでは克服できないものであることは明らか。国際社会の発展は地球規模で多国間が協働する機会となる」として、そのための戦略を今回の講演で二つ提案するとした。一つは、個々のプロジェクトに寄贈者（ドナー）をつなぐという草の根レベルのもの。もう一つは、国際的なレベルで作用するもので、国際的な開発作業を行うための共通の枠組みを確立するための世界的集まりを含んでいる。この会議の出席者は、組織の個々の状況をこれらの主義と戦略に合わせるように励んでいくべきであると語った。

国際的なレベルで作用するもので、国際的な開発作業を行うための共通の枠組みを確立するための・パネルディスカッションI「緊急支援とNGOの挑戦」をテーマとして

パネラー① Ishihara Kensho（日本／特定非営利活動法人 災害危機管理システムEarth理事長）

「緊急救援への新たな挑戦」 New Challenge to Emergency Relief

まず、最初に東日本大震災への各国の迅速な対応、台湾はじめ海外からの大きな支援に対し、敬意と感謝の意を述べた。

途中省略

地球規模の温暖化による異常気象などの被害は後をたちません。

次第に極大化していく自然の猛威は、予測や予想をはるかに超え、これからもアジア各地で自然災害が発生することが懸念される。

We cannot turn away from damage caused by global warming and abnormal weather. We must consider natural disasters that occurred in various parts of Asia.

いくら文明や科学技術が発達しても、私たち人間の暮らしは自然の営みには決して逆らうことのできない事実を認めざるをえないのである。

さらに今回の東日本の場合では、大地震、大津波により Fukushima 原発事故は、想定外の大惨事となりました。日本社会では「原子力発電」は絶対に安全と言われていた安全神話が崩壊しました。いまだに放射性物質は飛散し、原発周辺の住民の避難は続いています。

No matter how much civilization and technology may progress, we human beings can never go against nature. In Japan, the myth of "nuclear power safety" collapsed. Radioactive material is still spreading and residence near the nuclear power plant are still taking refuge.

今後は救援現場である被災地が被爆汚染、細菌による感染症の脅威など、想定外の事態にあることも事前に予知することが重要となりました。緊急時において十分に調査の精度を高め、安全を見極めた上で活動することも必要となります。

It became important to set up relief spots for the threat of infection by contamination and bacteria. It also became necessary to make accurate investigations for emergencies and safety.

今回の貴重な経験として緊急時の被災現場でのコーディネート活動が、救援活動を展開する大きな成果となったことをこの機会に発表させて頂き、今後も有事の際には互いに自国国内に限定することなく、海外支援ネットワークが有効に展開できるように提案したいと思います。

I would like to announce the results of these coordinated activities in the disaster areas and emergency rescue

operations during this important experience. And I would also like to propose an overseas support network that is not limited within the country.

そのためには、まず私たち日本の現状では「受け入れ」「人材提供」「輸送」「活動資金」等諸問題をクリアすることが必要です。

それは日本におけるNGO・NPOすべてが自立して活動する現状ではないという現実があります。有事の際、緊急に対する意識をさらに向上させる必要を痛感しています。

支援を受ける側ではなく、緊急時に有効に対処できるような手立てが示されることを期待しています。

For that purpose, it is required to clear problems, such as “clear entry”, “finding human resources”, “transportation”, and “funding”. All NGO's and NPO's in Japan cannot realistically work independently. It is necessary to be aware of emergency situations.

We hope to cope effectively in emergency situations.

特に日頃の「顔の見える関係づくり」が緊急時に大いに役立つことは、これまでの経験で認識しています。お互いに国や地域は違っても、平時から互いの組織の存在を認識し、日常の交流をはかることが緊急時に有効と考えます。今後も「顔の見える関係作り」が緊急時のネットワークに繋がるような会議であることを要望します。

From our experiences, we recognize the use of face to face relationships during emergencies in particular. Even from different countries, we recognize the existence of mutual organizations in times of peace and think it effective in emergencies to measure everyday exchanges.

From now on, we expect meetings to lead the network in face to face relationships in emergencies.

Thank you very much for listening to me today. 以<sup>上</sup>。

パネラー② Young Jin Park (韓国／全国災難救護協会 事務総長兼副会長)

「災害の種類による緊急救援活動〜二〇一〇年韓国・延坪島砲撃事件のケース〜」

人災の緊急事態もまた民間組織だけでなく公的機関の迅速な関与があつて効果的な対応が可能となる。延坪島の砲撃事件のような危険な状況下でさえ、現地での緊急救援復興活動は、被害を受けるであろう集団に対してなされることを必要とする。人災に應える投資者の間で、効果的な救援工程や調整をどのように組み立てていくかという問題は、近い将来、韓国で重要な問題となるだろう。

パネラー③ Yen-Ching Yen (台湾／中華民国搜救総隊主任秘書)

「二〇一二年アジアNGOs国際発展会議に従事して」

国際人道支援における任務は複雑で難しく、忍耐や智慧、さらには困難を打ち負かす勇気が必要とするが、それらはまた任務をうまく達成する重要な要素でもある。大きな国際的な災害に対し緊急支援を行い復興に尽力するには長い道のりである。災害による被害を最小限に抑えより早い復興を成し遂げるために、多国籍NGO組織の力を結集するには、「地球村」の概念が必要。※ 地球村：地球全体を一つに考えること

以下、発表内容割愛

パネラー④ Sushela Balasundaram (マレーシア／UNHCR難民救難救助計画助理官員、医師)

「緊急支援とNGOの挑戦」

パネラー⑤ 備中哲人 (日本／NGOピーススイングズ主任)

「先進国と発展途上国におけるNGO活動の挑戦」

パネラー⑥ 馬鍾麟 (台湾／中華民国外交部非政府組織国際事務会副執行長)



「国際緊急支援におけるNGOの挑戦」

国際人道支援は外交政策の一環であり、政府とNGOは密接にかかわるべきである。

・パネルディスカッションⅡ「長期国際発展の挑戦」

パネラー① Lourdes Louella Espadero Escandor (フィリピン／公民災難対応センター執行長)

「CDRCの挑戦／防災の普及と強化、国際発展の追及における社会の回復力」

パネラー② Biakung David (ミャンマー／国際全球希望動員会ミャンマー分会会長)

パネラー③ 渥美公秀 (日本／大阪大学教授、日本全国災害救援会理事長、日本災害救援ボランティアネットワーク

ク理事長)

パネラー④ Hong Minh Pham (ベトナム／ホーチミン市友好団体NGO管委會委員長)

パネラー⑤ Nina H.L. Kao (台湾／彰化キリスト教医院国際医療センター執行長)

パネラー⑥ Chris Wong (中国／香港人道災害危険削減事業CDRC役員)

### 3 「中華民国搜救總隊」とは

世界各地に隊員数二万人、常時緊急対応できる隊員四千人を擁する搜救總隊が設立されたのは、台湾大地震がきっかけとなりました。

「台湾では九二一大地震 きゅうにいいち」と呼ぶ……一九九九年の台湾大地震

日本が派遣した国際消防救助隊は、地震当日の夕方に台湾入りし、海外からの派遣としては最も早く、隊員数は総勢一四五人、各国の中で最大規模だった。

さらに日本の超党派の国会議員が阪神・淡路大震災で使用した仮設住宅を、台湾の被災者のために無償提供を政府に働きかけた。日本が寄贈した仮設住宅は約一〇〇〇棟。一〇月一六日に最初の住宅が完成した。

当時の李登輝前台湾総統は、

「勇気づけられたのは各国からの声だった。多くの国や救援組織がすぐさま援助を申し出てくれたのだ。決して私たちは孤独ではない。日本をはじめとする国際社会からの関心と協力が、どれほど私たちの支えになったことだろうか」と述べている。

中華民国搜救総隊は、台湾大地震後、日本財団から一億三千万円の支援を受けて装備が整えられたもので、李登輝前総統は「将来日本で地震があったら一番にかけつけます」と謝意を表明。

東日本大震災発生時に「今回の震災は、私たちが恩返しする番だ」

昨年その言葉を胸にかけつけ足止めとなっただけに、無念の思いを受け止めた、私と搜救総隊は大きな信頼で結ばれたといえる。また、NPO Earthにとってもこの海外支援のコーディネートを行ったことが国際支援を展開する成果につながっていった。

しかし、交流協会台北事務所（大使館の役割を果たす日本側の窓口）を通したレスキュー隊（中華民国搜救総隊）派遣の意思に対し、残念ながら一日返事を待たされたばかりか、「救助隊への要請はもっと先になる」というつれない返答だった。

「これは、前日の中国政府からの中国の救助隊派遣表明におもねったというのが真相だろう。

※おもねった（機嫌をとる・気に入られるように）

だが、わがレスキュー隊は日本政府の対応を待たず、総勢三五名が自主的に出発。日本のNPO法人の協力のもと、中国と同日の一二日に到着し、岩手で救援活動を行なった。少しは恩返しできただろうか——S A P I O——

五月号より

足止めされたレスキュー隊を一時保護したのが臨済宗台湾東京別院佛光山寺であった。台湾佛光山を中心に世界中で慈善活動を展開する「NGO国際佛光会」による支援、多くの物資が日本に届けられ、さらに被災地への奨学金、台湾・南華大学への四年間無料留学等の提案を東北三県の私学協会を通じて実現にこぎつけ、Earthの仲介により奨学金交付・台湾留学を実現することができました。

台湾仏教の概要 台湾国内四団体の活動が目立つー配布資料参照

こうしてEarthは中華民国搜救総隊の推薦により「二〇一二アジアNGOs国際発展会議」への招待を受けた。私が台北に滞在中、呂正宗総隊長は日本の救援組織であるNPO Earthに新たな提案をした。

それは台湾・日本・韓国を結ぶ連携組織・リーグ「アジアNGOs援助発展連盟」設立への構想でした。

「各国政府の参与を受けない、純粹に個人と非政府組織でつくり上げる組織」をめざし、「国境・民族・政治・宗教を越えて援助や連携を行いたい。援助と発展の連盟により、各組織・個人は最新の情報や資源を提供し、また真摯な心で交流し、互いに貴重な経験やノウハウを分かち合う、人類の平和のために援助と連携の場を作れないだろうか」と。そして発展連盟設立の後、正式に国連に登録する意思であることを明かした。

私はこの提案に対し、「まず組織の前に人と人。好意に対してお互いの友好信頼関係があってこそ、支援ひいては平和につながる連携が実現するだろう。その人間的行為を実現する場として日本にとどまらず発展していければ」と述べた。しかし、海外での活動経験豊富なNGOである総隊長の提案には、正直な気持ち多少戸惑いはありました。

「日本の組織の多くは、受け入れ・人材・輸送・資金調達等、どれも安定した状態になく、クリアしなければならぬ課題がある。加盟することには反対しないが、日本の状況・実情にあった協力を提供していきたい」今後、Earth関係者等々との検討を重ねていくとした。

今回の提案は、Earthへの信頼や期待もあり、今後さらに発展し国際的視野で活動することも新たな方向性への岐路でもあると考えます。

## 4 人道支援の原則は

世界中では、一九九五年の阪神淡路大震災から二〇一一年東日本大震災の間一六年間に、数多くの自然災害が起きていた。

死者と行方不明者が一万人以上という大規模な地震、津波だけをとっても、トルコ、インド、イラン、インド洋、パキスタン、中国四川、ハイチなどが数えられる。

その災害のたびに、地球規模による支援の手が差し伸べられた。そして支援の教訓を学ぶことによって、多くの新しい支援システムが構築され実践に応用されてきた。

これらの世界中で発生した自然災害には、日本からも人道支援活動として政府機関からは、国際緊急援助隊（JDR）や自衛隊が出動し、また多くの日本のNGOが緊急支援活動を行ったことは皆さんも周知のことでしょう。

今回、海外からの支援は、外務省の発表だけでも、一二六の国・地域・機関から、物資・寄付金による支援が行なわれ、先進国での災害では最大規模の国際支援であったといわれている。

さらに海外の民間団体や企業が日本の民間団体と直接やりとりして行われた支援も数多いことから、海外からの支援の全体像はさらに広がっていると考えられる。

こうした大規模な国際支援が行われた背景には、これまで日本が海外に対して行ってきた支援に対しての返礼的な意味合いや顔の見える関係による行動とも考えられ、国際的グローバルリズムにより国際間で国境や組織を越えた救援連携の高まりを感じられました。

※globalismとは、地球（世界）主義あるいは地球共同体主義、さらには地球益主義と呼びうるもので、世界を一つの人間社会システムとしてとらえる視点。

これからはさらに、こうしたシステムを通して人類の平和、経済福祉、社会正義、環境維持などさまざまに地球規模の「人道支援」は展開されていくだろう。

今回の東日本の場合には、特に災害の他に深刻な「原発事故」が重なり世界の関心が高まったことも事実です。国や組織を越えた連携や対応には、「仕組み」が必要であり、支援を受ける被災地の地域性、人と人の関係性を考慮した対応が求められる。

これからもNGO／NPOの調整のネットワークは過去の教訓や経験を将来に大いに役立つことを期待していただきたいと思います。

実際の被災地での経験話として……

少なくとも被災地現場で幅をきかす、他県からの行政組織等の応援やボランティアとは違い、確実に「核となる人材との出会い」により継続した現地との結びつきを可能にする真の人道支援とは、効率重視や・シナリオによる成果主義ではなく「人の優しさ」の発露でなければ「救いの手立て」にはならないでしょう。

## 5 東日本の場合からみえる課題

今思えば、今回の震災は、被害があまりにも甚大で広範囲に及び、現地の状況はライフラインや各通信機能が途絶したため、詳細かつ正確な情報を得ることは容易ではなかった。そのためできる限り多くの現場をまわり、被災者の方々と直接接して詳細にわたる情報収集に奔走しました。

さらに、十六年前の阪神の時代とは異なり、メディアによる災害報道に加え、携帯電話・インターネットの驚異的

な普及によりツイッターや動画サイトの利用が盛んになり、「ネット上の世間はまるで祭りのような」高揚感にとられ、延々と多種多様な「災害情報」が拡散され続けた。

その多くは大津波に驚き、その視座にずれが生じていたが、私たちは津波と対峙するのではなく人間重視。まず、被災地の人々に「寄り添う」ことによって、どれだけ相手の悲しみや痛みを理解し、相手に応えられるのか。

行政等の手が回らない地域、あるいはメディア報道などからこぼれ落ちていく人々との出会いの中で、子どもたちに希望を与え、着の身着のまままで逃げた人々の生活を支えることが急務と判断し、まず、精神的心配り支えになる行動に繋げていくことを目指しました。

とりあえず現場からあがってくる必要な要求に可能な限り応え、その都度必要な物資や資材の提供を新聞・ラジオなど報道関係を通して広く社会に救済を求めた。

宗門関係では全国各管区寺院・個人・全国日青・女性教師の会・管区寺院婦人会・ロータスカフェはじめ、全日本仏教会等から多くのご支援を頂き、九州教区からは、被災地支援に役立てて欲しいと「旧伝道車」の提供も受けることができました。多くのご支援に有りがたく感謝しています。

今回、東日本大震災支援の現場は、他国での大規模災害の現場と同様、海外各国からの援助チーム、複数の国連人道機関、赤十字、NGO/NPO、ボランティア等、規模・性格の異なる団体から、規格・言語・内容・質が異なる様々な形で支援提供されることになった。

従って、支援が提供されたとしても、その支援を受け入れ、支援を必要とする地域・人に的確にマッチングさせる仕組みである「受入れシステム」がなければ、支援を活用することは難しい状況でした。いかに支援の申し出の受け入れを調整し、現場のニーズに応じて、被災者に「つなぐ」ことができるかが重要な鍵となった。

また被災者への支援は行政がサービスを提供することが前提であり、ボランティアが手伝う程度で、NPO/NGOが公共サービスを提供するという想定が行政側に存在していなかった。さらに想定外の規模の災害で、自治体行政の関係者も被災し、高齢者、障がい者、女性、子ども等立場によっても多様なニーズが噴出した状況では、行政による対応は法的に限界が生じたり、画一的な行政サービスでは行き届かないギャップがあちこちにみられました。現場のつぶつぶやき……

行政の基本は、公平性を優先する。いつも「上から目線」の対応を感じながら

一人ひとりのニーズには応えることはありません

集団での扱いが原則。個人はありませんよ

そのため、時に被災者は「我慢を強いられる」こともあるのです……

それでは、被災者のニーズはどうなるのか。

「申請してはじめてサービスが受けられる」という、もう一つの行政の仕組みには限界がありました。

被災者は、被災し困難を抱えながら、「申請する仕組みがある」という情報を得られなかったり。たとえ、知ったとしてもどのように申請できるのか。とまどいや、多くのニーズではあきらめにかわってしまう場合が多い。

そのため、これまでの被災地での実情を知り、さまざまな経験を活かして、私たちはNGO独自の支援活動体制を構築し「支援する側される側」の立場を解消する調整のメカニズムを構築していかねばなりませんでした。

## 6 人道支援への発展を目指して

現実には広範囲に渡る被害の大きさや情報も乏しい状況であり、当初から、支援メニューが絞りきれないことを訴え、多くの皆様の善意を、「必要な時に、必要な物を購入するための支援金」としてご理解の上提供していただきま

した。随時、支援報告をすることによって、従来「募金はするが、気持ちは添えられない」という、むなしさを感じていた多くの皆様が、Earthの支援のネットワークによって、直接支援活動に参加しているという実感を持って頂くことができたのではないだろうか。

こうして東日本大震災とのかかわりは、当初、予想外の「台湾来日」に驚いたが、阪神以来一七年間の活動の中で培われたさまざまな人とのつながり、信頼の絆が緊急時においてまた新たな縁を結ぶことになり、ネットワークの真価が問われることになりました。

どんな困難な現場でも被災地社会やニーズに軸足を置いた価値観を信念として、これまでも災害時にはEarthが支援者の思いを届ける役目を担ってこられたが、このEarthの支援のネットワークが今回、東日本でも「被災者と支援者の架け橋になり、被災者へとつながった」と実感することができました。

人道支援といえば、救済活動に生涯を捧げたマザーテレサでしょう。

彼女は、自ら「社会福祉家でも慈善事業家でもないのですよ。もし、私が社会福祉や慈善のために活動するのだしたら、幸せだった家も捨てなかつたでしょうし、両親とも別れなかつたでしょう。」「私は神に捧げた身。ヒューマニズムでもなく、私自身当たり前のことです。」

立場や、役目ではなく、私自身の良心の好意だと言われている。

〈マザー・テレサ あふれる愛〉 講談社刊

人道支援とは一時的の慰めや不足するものへの補完だけでは、満たされるものではない。

また、平時において災害を想定した場合の備えとして、一部の備蓄への奨励や炊き出しの訓練など繰り返すことは賄えるものではない。

とかく支援する側の多くは被災者という「マス」として集団でひとつに扱おうとするものです。



「マス」でくくるのではなく、そこに一人ひとりの顔を見出すこと、そして一人ひとりの言葉に耳を傾けられるようにするためにはどうしたらいいのでしょうか。

ガレキの中でどれだけの人に心を尽くすことができるのか、いつも一人の人間の限界を感じます。

現場の心情はさまざまに厳しい。まして遺族となった方々、何もかもすべてを失い、大きな喪失感、明日への望みさえ絶たれた人々、肉親家族をはじめ生きる基本と成る自宅、財産・コミュニティ、地域、社会が崩壊して何を信じて生きていけばいいのか。

自ら生き残ったことが罪悪にも感じ、すべてが信じられなくなっている、すべてが不信の時。

突然目の前に現れて、「何か困ったことはありませんか」と問われても絶句してしまふ。

見ず知らずの他人を受け入れられるだろうか。

私たちは、どこまで相手の立場にたつて膝をおろすことができるでしょうか。

その場からは去れないことが多々ありました。

どれだけ時間と良心を尽くすことが必要でしょう。

もはや、己の行為に（自分の行い）に陶酔（酔う）ことなく、菩薩行の実践を実行してください。

「自分のことより他人の幸せを願える人を増やしたい」との願い。

これは私たちにとっては大事な教化です。世間で多くの「心を尽くせる人」を増やしていきましょう。

## 7 最後に……

日本国内で一八年間、被災地の人々と思いを共有し、長い間互いに見守ってきた。

時間とともに、まさに生老病死の無常を感じます。復興住宅で仲間がまた一人孤独死。数日気づいてやることができ

ませんでした。みんなで簡素でも供養の場で共に涙し、共に祈りを捧げました。これ以上被害を拡大させない為にも、阪神当時から「絶対に自分の命は自分で守れ」は大きな目標でした。

今回は津波「てんでんこ」です。

東北沿岸部の哀しい過去からの教訓です。今回も多くの死を目の当たりにした。

「多くの人は歳を重ね老境に至り、心身の衰えを感じ、ふと、『臨終のこと』に思いをいたす」。

「臨終に臨み……医師が脈をとりその時間を告げる」死とはいささかちがう。

津波は、それぞれの人の人生の証。意味すらも奪った。

誰もが「いまわの際」今を限りに……死ぬ瞬間、

津波に巻き込まれ死する恐怖・苦しみ・無念さ、を、誰が知りうるであろうか。

苦しみのあまり「舌をかんだ」と推察される方、

顔中砂がいっぱいつまった方、

誰もその瞬間を看取る人はなかった。

助かるはずの命も、他者のために多くが犠牲になりました。

私も自分自身の良心に導かれながらここまでできたけれど、

いのちを救うことができなかつた思いは、今も晴れません。

とかく災害が起きると行かないより、現場に行つて見ることは大事なことと言われるが、何を求められているのかを、知ること。そのためには多くの地道な労力が必要である。

互いの心の中に相手の心を見出せたとき、信頼の絆が生まれるのではないのでしょうか。

心に響くまで被災地と付き合ってください。

そして常に心の中にこの言葉を刻んでみてください。

「視線をさげずに 視点をさげる」

「視線をさげる」ことは哀れみ・同情の気持ちのあらわれであり、自立を妨げる原因になる事が多くみられました。さげていることは上から視線になっている自分です。

「視点をさげる」ことによって、相手と同じ立場に立った視線で向き合うことができるでしょう。

宗教者である私たちは、覚悟の上での被災地であってほしいと思います。

相手の人が、ひとりでも「救われたな」と、思えるとき、法華経の中の「変化の人」のお言葉を思い出してください。

## 8 — 皆共に生きる世界を —

かつて石川教張先生は「布教伝道」について、

現代の宗教のあり方とは、自分自身の信仰体験をもって伝えることである。

ゆえに、信仰に基づく生き方の提示でなくてはならない、と教えられています。

知識の伝達ではなく「何をしているのか。何をしようとしているのか」具体的に示すものである。

共に悩み共に考える姿勢が必要であると。

「皆共に仏道を求め、成就する」ことが、法華経お題目の信仰に生きるわれわれの最も尊い精神であるといえるのではないか。

佛滅後の未来における実践を予言では、釈尊に代わって菩薩が活躍することになります。

菩薩は仏様のこころをその心とするものであります。

苦難する者への「神通力」変化によって、在家・出家者の信者を作り出し、つまり救いの手立てを実践する人を派

遣・遣わし（つかわす）衛護となさんと説かれています。

仏が護ってくれるのは、仏の力がその人自身に加わっているからであり、仏の心であります。

まさに菩薩行の実践は、互いの心の中に仏を見出すことであり、皆さん自身の信仰の姿がこれからも多くの「変化の人」となって、多くの人々の救いとなる事を願っています。

是非、此の機会に実践で役立ててください。